

現代ロシア語名詞アクセント法にかかわる形態論的・音韻論的条件の関係について

安藤 智子

1. 本研究の背景と目的

ロシア語はいわゆる自由アクセント言語の代表格であり、特定の接尾辞を持つ語を除けばストレス位置を音素の配列から予測することはできず、1つの語彙素であっても屈折語形によってストレスの位置が異なることさえある。そのため外国語としてロシア語を学ぶ者にとってアクセントが1つの難関となるだけでなく、母語話者にさえ、語によっては正しいとされるストレス位置に自信がなかったりゆれが見られたりする。一方で、無意味語においてはストレスの位置がかなりの高率で母語話者間の一致を見せるという事実もあり、ロシア語のストレス位置がどのような条件によって決まるのか、複合的な説明が必要になることが容易に推測される。

ロシア語のアクセントについては、Garde (1976) や Зализняк (1985), Halle (1997) など、これまで多くの通時的研究や印欧語あるいはスラヴ諸語との比較研究がなされているが、そのほとんどは自由アクセント言語であるロシア語のストレス位置について音韻論的な条件やデフォルトを問うことはせず、語を構成する各形態素の特性とその形態素の語内部での位置によって決定されるという分析をしている。現代語のストレスの配置を生成音韻論の枠組みでとらえた Halle (1971) や Idsardi (1992) でも、基底形において形態素ごとにストレスに関する何らかの特性が仮定されている点で同じである。こうした分析において、各形態素がストレスに関する特性を持つと仮定することで、すべての屈折形で語幹ないし屈折語尾の決まった位置にストレスを持つ語や屈折形によって語幹と語尾の間でストレスが移動する語があるという事実がうまく説明されている。このような分析の背景には、共通スラヴ語に遡る広義のアクセント（ストレスおよび声調）を、声調を失ったロシア語がストレスの形で引き継いでいるという指摘があり、それゆえに現代語の各語の音韻構造からストレス位置を予測することは不可能であるという結論に至る。

一方、現代語においておよそ9割の名詞が語幹に固定したストレスを持つことや、未知の語では母語話者の間でストレス位置が一致することが多いという事実は、上記のような通時的研究の成果のみからは説明がつかない。そこで、安藤 (2009) において、筆者はロシア語ネイティブスピーカーに対する無意味語のストレス位置の調査を行った。これに類する以前の研究として、Николаева (1971) や Crosswhite et al. (2003) が挙げられる。前者は、被験者となるロシア語話者にとって未知の借用語を用いて、2～4音節語のストレス位置を調べたものである。こ

の研究からロシア語のストレス位置のデフォルトを指す音韻論的条件が見出されたが、これには形態論的分析や統計学的な配慮に欠ける点があり、後者はこれを補って最適性理論の枠組みでの説明を試みたものである。

このように、ロシア語のストレス位置に関する研究は、通時的研究に基づく形態素固有の条件に限定されたものと、現代ロシア語の借用語や無意味語による音韻論的なデフォルトアクセントに重点を置いたものとの2つの流れがあるが、これらをつなぐ接点が明確になっているとは言い難い状況にある。

本稿では、第2節においてこれらの先行研究のまとめと課題を提示し、第3節においてその課題について借用語アクセントの研究からの視点を加える。第4節では、現代語における条件の混在と各形態素に指定されていると考えられる情報について考察し、2つのアクセント研究の流れをつなぐ説明を提案する。

2. 先行研究における二つの流れ

第1節で述べたように、ロシア語のアクセントの研究には、通時的研究を背景として各形態素の持つ特性を仮定することにより様々なストレスのパターンを説明するものと、音韻論的条件と形態論的条件からデフォルトのストレス位置を探ろうとするものとの二つの流れがある。本節では、2.1で前者を、2.2で後者を概観し、それぞれの課題を明らかにする。

2.1 通時的研究を背景とする自由アクセントの説明

現代ロシア語の名詞は、大まかにストレスの置かれ方によって3つのタイプに分けられる(表1)。1つは、屈折のパラダイム全体にわたって語幹のいずれか決まった音節にストレスを持つもので、Федянина (1982) のデータでは34,000語の名詞の91% (31,600語) がこれに当たる。これを語幹固定アクセントと呼ぶ。2つ目は、パラダイム全体にわたって屈折語尾の第1音節(ゼロ語尾を持つ語形では語幹末)にストレスを持つタイプで、Федянина (1982) のデータでは名詞の7% (2,420語) がこれに当たり、語尾固定アクセントと呼ばれる。3つ目は、パラダイムの中でストレスの位置が一定しないもので、ある屈折形では語幹に、別の屈折形では屈折語尾の第1音節にストレスを持つというものである。Федянина (1982) のデータでは名詞の2% (700語) がこれに当たり、移動アクセントと呼ばれる。移動アクセントにも細かく見るといくつかのパターンがあるが、ここでは立ち入らない。

表1 ロシア語の名詞パラダイムにおける形態素の組み合わせの例と3つのストレスパターン

	語幹①「牝牛」	語幹②「足」	語幹③「鬚鬚」	
強語尾 -а	ко'ров-а	стоп-а	бород-а	単数主格形
弱語尾 -у	ко'ров-у	стоп-у	'бород-у	単数対格形
	語幹固定アクセント	語尾固定アクセント	移動アクセント	

Зализняк (1985) 等において、こうした3つのタイプは次のように説明されている。すなわち、それぞれの名詞は語幹と屈折語尾を持つが、語幹には①語幹自体がストレスを持つもの、②語幹の後ろにストレスを置くもの、③ストレス位置に関する指定を持たないもの、という3種類があり、①のタイプの語幹を持つ名詞が語幹固定アクセント、②が語尾固定アクセント、③が移動アクセントを示すというのである。ここで、①と②のタイプでは語幹の持つ特性に従って語のストレス位置がパラダイム全体にわたって決まることになる。これに対し、③のタイプでは、語尾の特性によって決まる。語尾には、語尾自体がストレスを持とうとする強語尾と、ストレスに関する指定を持たない弱語尾の2種類があり、③のタイプの語幹に強語尾が付く語形ではその語尾の第1音節にストレスが置かれ、弱語尾が付く語形では語頭（すなわち語幹の第1音節）にストレスが置かれるために、屈折パラダイムの中でストレス位置の交替が生じるとされる。つまり、語幹も語尾もストレスに関する指定を持たない場合に、デフォルト的な位置として語頭音節にストレスを置くということである。現代語ではわずか2%の語の一部の屈折形が「無標」のストレス位置を示すということになる。

①・②のタイプの語幹にも強語尾と弱語尾が付くが、この場合には語尾でなく語幹の特性が優先されることによってストレス位置が決まるのでパラダイム内でのストレスの移動が生じない。このことは、「形態素が持つストレスに関する特性は、左に位置する形態素のものが優先される」と一般化され、派生接辞を持つ語のストレスの説明にも通じる原理とされている。

このような形態素のタイプ（語根では①、②、③、語尾では強語尾と弱語尾）は、共通スラヴ語の声調の種類およびストレスの有無に由来するものとされ、声調を失った現代ロシア語では各形態素がどのタイプであるかを音素の配列などから予測することはできない。このため、各名詞がどのタイプのアクセントを呈するかも音韻論的条件からは予測できず、自由アクセント言語の性質を呈するのである。

このような通時的研究を背景とした説明にはさらに三つの但し書きが必要である。

第一に、共通スラヴ語において対応する形態素の声調やストレスから現代ロシア語のストレス位置が完全には予測できないということである。これには大きく分けて三つの事情がある。

一つは、他の品詞と同じ語根を持つ名詞の場合には、他の品詞の語のストレス位置からの類推によって上記の予測とは異なるストレス位置を示す場合があるという事情である。

二つ目の事情は、特に移動アクセントを示す少数派の語が、より多数の語が所属するタイプへと既に変化している場合があるということである。語幹固定アクセントに転じるものもあれば、同じ移動アクセントでありながら異なる移動のパターンに転じるものもある。こうした変化の一部は現在も進行中とみられ、母語話者の間でストレス位置の判断にゆれが観察される。

三つ目の事情は、異なる数・格でありながら同じ音素配列を持つ屈折語尾をもつ語形が、ストレスの位置によって弁別されるように変化しているという点である。例えば *высот-а* (単数主格)「高さ」は単数生格形と複数主格形がともに *высот-ы* であり、かつては語尾固定アクセントであったため全くの同形であったとされるが、単数生格形で語尾 (*высот-ы*)、複数主格形で語幹末 (*высот-ы*) にストレスを持ち、ストレス位置によって弁別されるようになっている。これはさらに単数形全体と複数形全体とがストレス位置によって対立するような変化ともつながっている。

第二の但し書きは、①のタイプの複数音節語幹において、どの音節にストレスを置くかという問題である。語幹は、1つの語根のみからなる場合(単純名詞)と、語根に接頭辞や接尾辞が付く場合(派生名詞)、さらに複数の語根を持つ場合(複合名詞)がある。

まず、単純名詞で語根が複数の音節からなるものは少数派であると言ってよい。借用語には多数あるが、通時的研究の中心となっているのは固有語であり、固有語で複数音節からなる語根のほとんどは東スラヴ語において起こった母音重挿 (pleophony) によるものである。母音重挿の場合には、上昇調 (acute) に由来する①のタイプは高調に結びついていた後ろのモーラに由来する第2音節がストレスを持つ(例えば、上昇調の *kōrva > ко́ров-а*「牝牛」)。母音重挿に起因しない複数音節語幹を持つ固有語の単純語は少ないが、普通2音節語であり、母音重挿の場合と同様に第2音節がストレスを持つ。例外は *месяц-0*「月」、*тысяч-а*「千」など少数である。

次に、派生語のうち、接頭辞がストレスに影響を与えるのは、限られた接頭辞の場合のみである。これは、この接頭辞がそれ自体にストレスを持つという、①の語幹や強語尾のような性質を持っているためであり、他の接頭辞は③の語幹や弱語尾のようにストレスに関する指定を持たないものと説明されている。

一方、派生接尾辞には様々なタイプがある。①の語幹のようにそれ自体にストレスを置く性質を持つもの、②のようにその後ろにストレスを置こうとするもの、③のようにストレスの指定を持たないものがあるほか、接尾辞の直前の音節にストレスを置こうとするものもある。

さらに、複合語について言えば、連結された語根が単純語として現れるときに表出する①～③の特性にかかわらず、少数の例外を除いて、語幹全体として①のタイプとなり語幹固定アクセントを示す。このとき、ストレスは右側の語根に置かれるのが生産的である。

三つ目の但し書きとして、支配的接尾辞と呼ばれる形態素の存在がある。これは、派生接尾辞として語根の右側にありながら、自己アクセントの右側にあっても派生接尾辞自体がス

トレスの位置を決定するというふるまいを示すものである。このような形態素は、Зализняк (1985) が挙げた形態素を見ると、他言語から借用されたと考えられるものが多いが、この存在は「左優位」の原則を覆すものである。

このように、形態素にストレスに関する指定の存在を仮定した分析により、ロシア語のアクセントに特徴的な様々な事象を首尾よく説明することができるが、現代ロシア語のアクセント法を共時的に見るとき、いくつかの問題が浮かび上がってくる。

- (1) a. 複数音節からなる語幹のストレス位置を決める仕組みはどのようなものか。
 - b. 有標的な移動アクセントを示す③の語幹には現代語においても指定がないのか。
 - c. ストレス位置にゆれの観察される語が持つアクセント指定はどうなっているのか。
- こうした問題のうち、特に (1a) は借用語が増大した現代語において重要であると言える。次節では、これについての先行研究を整理する。

2.2 ストレス位置を決める音韻論的・形態論的条件の探究

本節では、音韻論的条件と形態論的条件からデフォルトのストレス位置を探ろうとする試みについて検討する。

上述のように、固有語の語根の多くが単音節であるのに対し、ロシア語には複数音節からなる語幹を持つ多くの借用語が存在している。借用語のストレス位置は、固有語に増して語幹固定アクセントの割合が高いことから、複数音節語幹を持つ語についてその語幹の中のどの音節にストレスを持つかというのが、現代語のアクセント法を考える上では避けて通れない問題であり、本稿では第3節で扱う。しかし、借用語のアクセントの研究は、しばしば自由アクセント言語におけるデフォルトのストレス位置の探究に大きなヒントをもたらす一方で、原語のアクセントの影響や、借用の時期、定着度、専門家アクセントの扱い、借用の過程（教師の発話か、交易などの場面でのピジン的な会話か、書物か）、他の言語を経由していないかなど、考慮に入れなければならない点も多い。そこで、純粋にデフォルトのアクセントを調べようとするなら、まずは影響を及ぼしうる様々な要素を取り除いた無意味語やそれに類した検査語による調査が必要となる。

2.2.1 未知の借用語を用いた音韻論的条件の探究

デフォルトのストレス位置を探る試みの一つとして、Николаева (1971) が挙げられる。Николаева (1971) は、被験者となるロシア語話者にとって未知のロシア語における借用語を用い、2～4音節語のストレス位置を調べたものである。借用語ではあるが、未知の語という点で、無意味語に近いものではある。この研究から、ロシア語のストレス位置を決める鍵として次のような音韻論的条件が指摘された。

(2) a. 語末が母音か子音か

- b. 子音で終わる語の音節の数
- c. 子音で終わる語の最終音節の母音のタイプ
- d. 子音で終わる語の二重母音 -ай, -ей の有無
- e. 子音で終わる語の母音連続 ay, oy の有無

(2a) については、語末が母音の場合は語の次末音節にストレスが置かれる場合が多いが、語末が子音の場合は (2b) と絡み合って、3音節語で語末音節に置かれる傾向が強いのに対し、2, 4音節語では語末音節と次末音節がほぼ同じくらいの割合となっている。語の音節数によって傾向が異なることには、用いられた検査語の語末の音の偏りに一因がある可能性がある。

(2c) は、非前舌母音を持つ音節の方が前舌母音を持つ音節に比べてストレスを持ちやすいという指摘である。これは、Crosswhite (2003) も指摘しているが、唯一の広母音 /a/ が非前舌母音と分類されていることで、ソノリティと直結する母音の広さが影響を及ぼしている可能性があり、妥当な分析とは言えない。Crosswhite (2003) による、同じデータを /a/ を除外して整理した分析では、舌の前後位置の影響も、狭母音 /i/, /u/ か中母音 /o/, /e/ かという広さの影響もないとされている。

さらに、広母音を含めて母音の広さのストレス位置への影響があるかどうか調べるため、同じ Николаева (1971) のデータを、母音の広さを軸として整理してみると、表2の数値が得られる。表中の数値は、下段の括弧内が検査語数であり、10名の被験者の反応が上段に記載されている。上段は語の次末音節：末尾音節にそれぞれストレスが置かれた反応の数である。下段の括弧の右側には、安藤 (2009) でデフォルトと仮定される位置、すなわち子音で終わる語の末尾音節と母音で終わる語の次末音節に当てはまる割合が表示されている。該当する検査語数が少なく、割合に意味のない項目もあるが、子音で終わる2, 3音節語に限って言えば、末尾音節が広母音を持つ場合には末尾音節にストレスが置かれる割合が高いようである。しかし、4音節語や母音で終わる語については必ずしもそのような傾向が見出せないため、このデータから母音の広さの影響を断定することはできない。

Crosswhite (2003) による /a/ を含めた Николаева (1971) のデータの分析では、末尾音節と次末音節の母音の広さの関係に着目し、同じ広さ・次末音節が末尾音節より広い場合・末尾音節が次末音節より広い場合に分けて、末尾音節と次末音節のどちらかにストレスが置かれたケースの中でそれぞれの音節に置かれた割合を比較している。ここでは、子音で終わる語の場合には母音の広さによる影響はまったく見てとれず、母音で終わる語の場合には別の形態論的要因によってむしろ狭い母音の方にストレスが引き寄せられているように見えることが指摘されている。結局、この分析においても、この Николаева (1971) のデータに母音の広さの影響は見られないようである。

表 2

		語末から2音節の母音の広さ								
	語末	広広	中中	狭狭	広中	広狭	中広	中狭	狭広	狭中
2音節語	子音	16:54 (7)77%	110:110 (22)50%	24:36 (6)60%	41:99 (14)70%	58:52 (11)47%	5:35 (4)88%	41:49 (9)54%	15:45 (6)75%	72:78 (15)52%
	母音	15:5 (2)75%	36:14 (5)72%	10:0 (1)100%	4:6 (1)40%	10:0 (1)100%	20:0 (2)100%	20:0 (2)100%	8:2 (1)80%	10:0 (1)100%
3音節語	子音	0:30 (3)100%	5:55 (6)92%	16:33 (6)55%	6:44 (5)88%	10:20 (3)67%	0:50 (5)100%	8:40 (5)80%	0:10 (1)100%	26:58 (10)58%
	母音	15:5 (2)75%	8:2 (1)80%	9:1 (1)90%	29:1 (3)97%	12:8 (2)60%	45:5 (5)90%	10:10 (2)50%	38:9 (6)63%	11:8 (2)55%
4音節語	子音		2:18 (2)90%		8:2 (1)20%	14:6 (2)30%	10:0 (1)0%	18:22 (4)55%		8:6 (2)30%
	母音	20:0 (2)100%		10:0 (1)100%	10:0 (1)100%		65:1 (7)93%	8:2 (1)80%	58:0 (9)64%	13:0 (2)65%

次に、Николаева (1971) の指摘 (2d) については、ロシア語には二重母音が存在しないので正確には「原語における二重母音」ということになるが、ロシア語においてこれに対応する -ай /-aj/, -ей /-ej/ を持つ語のうち、これらが語末音節にあるとき、その語末音節がストレスを持つ割合が高まるというものである。これは、もともと (й /j/ を含む) 子音で終わる語が末尾音節にストレスを持つ場合が多いので、原語における二重母音の影響を見極めるのは困難である。さらに、単に母音+йというのではなく -ай, -ей に限定することによって、特定の言語からの借用を想起させ、その言語からの他の借用語に照らして類推が働く可能性が否定できず、純粋に音韻論的条件とは言えない。

最後に、(2e) は、語末から2, 3音節以内の母音連続 ay /au/ および oy /ou/ について、そのうちの左側の母音を含む音節にストレスが置かれやすいというものである。これらの母音連続も、原語では二重母音である可能性が高い。そのとき、英語やドイツ語等が原語となっていれば、ストレスが後半の /u/ に当たる部分に置かれることはないため、原語のストレスの影響が大いに考えられる。このように、指摘 (2d), (2e) は音韻論的デフォルト位置に関する指摘というより、借用語に限定した傾向とみなすべきであろう。

一方で、Николаева (1971) は、多音節語における語頭の要素、子音連続、語末子音の硬軟はストレス位置に影響を与えないとした。この結論のうち子音連続に関しては、2.2.3 で見る安藤 (2009) の結果と一致する。

2.2.2 無意味語を用いた形態論的条件の探究

Николаева (1971) が音節数や語末が子音／母音のどちらであるかといった音韻論的特徴のみに注目していたのに対し、Crosswhite et al. (2003) は形態論的な構造に着目し、ストレス位置の

デフォルトが語幹末であるという明確な指摘を行ったうえで、最適性理論の枠組みでの説明を試みた。

Crosswhite et al. (2003) の行った実験では、無意味語の末尾の要素を屈折語尾としてありうるもの (-am 等) とそうでないもの (-um 等) に分けたうえで、屈折語尾になりうるものについては屈折語尾として機能する (-am の場合は複数与格形語尾) か語幹の末尾 (-am のように子音で終わる場合は男性名詞単数主格形あるいは同対格形) となるかを文中における統語的な条件によってコントロールしている。そして、それぞれの場合でストレスが置かれる位置についての調査を行っている。その結果、特に、末尾が屈折語尾になりえない形のもの、90%以上と高い率で語幹末にストレスが置かれた。一方、屈折語尾になりうる末尾要素が語幹の末尾として表れている検査語では65%と比較的低い割合にとどまっており、これについて Crosswhite et al. (2003: 157) は ‘This may be due to a propensity to find morphological structure if it is phonetically (but not syntactically) supported.’ と述べている。全体としては80%の高率で語幹末にストレスが置かれるという結果が提示され、ストレス位置のデフォルトを語幹末とする仮説に一致すると結論付けられている。

2.2.3 無意味語を用いた音韻論的条件の探求

先に述べたように、デフォルトのストレス位置を探るには、形態素に固有の性質や類推が機能しない無意味語による調査が有用である。Crosswhite et al. (2003) は無意味語を用いた調査を行ったが、検査語のリストが明示されていない。次節で見るとように借用語のストレスに関しては、語末の要素によりストレス位置の分布に偏りがあることが指摘されており、そうした偏りが意味的な関連のない無意味語にも見られるかどうかは明らかではないため、デフォルトのアクセントを調べるにはある程度の語末の形のヴァリエーションを持った検査語を用意する必要がある。そこで筆者は安藤 (2009) においてそうした調査を行い、次の結果を得た。

- (3) a. 語末が子音である場合は語末音節、語末が母音である場合には次末音節にストレスが置かれることが多い。
 b. 音節の重さはストレス位置に影響を与えない。
 c. 語幹において、/a/ あるいは /o/ を持つ音節は狭母音を持つ音節に比べてストレスが置かれることが多い場合がある。
 d. 音節頭子音の有無と数はストレス位置に影響を与えない。
 e. 既存の語において偏ったストレス位置の分布を示す語末要素が無意味語においてもその偏りを示すとは言えない。

このうち、(3a) は2.2.1 で見た Николаева (1971) の結果に重なるとともに、語幹末のストレス位置がデフォルトであると言える可能性を示唆する。これは2.2.2 で見た Crosswhite et al.

(2003) の結論とも一致する。ただし、この調査ではすべての語形が主格形をとるようなキャリア文に入れて行われたので、母音で終わる語についてはその末尾母音が主格形語尾ととらえられているか不変化語の末尾（つまり語幹内部）ととらえられているかが不明である。

(3e) からは、借用語と無意味語との相違が見てとれる。借用語を含む既存の語において偏ったストレス位置の分布を示す語末要素は、意味上あるいは機能上の共通性を持った形態素が何らかのストレスに関する性質も共有している場合が多いと考えられる。これに対し、無意味語は（少なくともこの実験では被験者に対して無意味語であることが明らかにされていた）、語末の音連鎖が同じであっても、意味・機能上の共通性もなければストレスに関する性質も共有せず、類推の対象となる形態素と認識されていないと考えられる。

3. 借用語アクセントの考察

ストレス位置のデフォルトを究明するうえで、現代語における借用語は、無意味語とは異なり、上述のようにストレスに影響を与えうるものとして考慮すべき様々な要因をはらんでいるが、少なくとも過去の声調に由来する特性は考慮する必要がない。また、無意味語とは違って実際に存在し、用いられている語として有用なデータが得られるものと考えられる。

ここでは、3.1において借用語全般のストレスに関する先行研究 *Суперанская* (1968) を概観し、3.2においてこの *Суперанская* (1968) の用いたデータを語幹と屈折語尾との境界を考慮に入れて再分析する。さらに、3.3において、比較的新しく借入された語が多い英語からの借用語のデータに対し、原語のストレス位置や語構成を考慮に入れた分析を試みる。

3.1 *Суперанская* (1968) の指摘

ロシア語には、17世紀以前にも、ギリシア語・ラテン語からの宗教や学術に関する語彙を始め、ポーランド語等の他のスラヴ語や近隣のドイツ語、さらにトルコ語など東方から多くの語彙が借用されているが、18世紀のピョートル1世の治世以降はフランス語・オランダ語・英語などからの借用が急増している。さらに、近代以降は英語からの借用語も多い。*Суперанская* (1968: 257f) によれば、18世紀には貴族などの限られた人々が外国語に接して原語のアクセントのままで借用された語を用いていたが、19世紀には語が定着し普及するにつれて原語を知らない人々にも借用語が用いられるようになり、その過程でストレスの位置にゆれが生じたという。こうしたゆれは、20世紀になって新しいストレス位置に落ち着いてきたと述べられている。

借用語のストレス位置が原語のアクセントの位置によって決定されるという主張に対しては、*Суперанская* (1968: 23, 258f) は、話者にとって借用元の言語とそのアクセント規則を知ることが実質的に不可能であると述べ、実際に原語のアクセントとロシア語に借用された後のス

トレス位置が異なる例を挙げている。こうした借用語のストレス位置について、同書は類推によって決まる部分が多いことを主張し、5,159語の借用語を分析して次のように結論付けている。

(4) a. 借用語の単数主格形は語末から3つ目までの音節のいずれかにストレスを持つ (Суперанская (1968: 256))。

b. 借用語のストレス位置はロシア語においてその語末の要素の類似によるグループごとに結集する (Суперанская (1968: 259))。

(4b)の「語末の要素」とは、屈折語尾 *-а* 等の場合もあるし、派生接尾辞+屈折語尾の *-ия* 等の場合もあるが、形態素によって分けられているわけではなく、偶然に語末の音素配列あるいは語末子音の特徴が一致しているものもひとまとめにされている。ここで述べられているのは、語末から3音節目までのうちのいずれにストレスが置かれるかは語末の要素によって大きな偏りがある（一方、語頭の要素はあまり関与しない）ということである。例えば、次節に挙げる表3で確認できるが、Суперанская (1968)の借用語のリストのうち、ストレス位置のゆれがあるとされたものを除くと、硬子音（非硬口蓋化子音）に終わる名詞は語末音節にストレスを持つもの (I) が1,558語、次末音節 (II) が799語、前次末音節 (III) が67語であるのに対し、*-ия* に終わる名詞は語末音節にストレスを持つものが0、次末音節が88語、前次末音節が421語というように、分布に著しい偏りが認められる。

その一方で、Суперанская (1968: 260) は、借用時期が新しくてまだストレスのゆれを生じる前の語は、類推すべき仲間の語を「探している」段階にあり、原則的に原語のアクセントを保持しているとも、また、20世紀には既に借用の土壌がロシア語の中に形成されているためにストレスのゆれをあまり起こさずに語が定着するとも述べている。結局、原語のままのストレス位置を示すものもあれば、上述のように語末が似た語からの類推でストレス位置が決まるものもあり、一様ではないということである。

3.2 Суперанская (1968) のデータの再検討

Суперанская (1968) が指摘した、語末の要素によるストレスの偏りについて、同じデータをもとに再検討してみたい。その狙いは、語末の要素によって、語幹と屈折語尾を分けて考えることにある。

表3はСуперанская (1968: 257) の表12を筆者が訳し、行の順を並べ替えたものである。行を並べ替えたのは、ゼロ語尾の語形すなわち子音で終わる語（「硬子音」～「軟子音で終わる女性名詞」）と母音で終わるが屈折しない語（「*-а*屈折無し」～「*-я*」）と屈折語尾となる母音で終わる語（「*-а*, *-я*」～「複数形で用いられることの方が多い語」）を並べて示すためである。これをそれぞれのグループごとに集計し、ストレス位置の割合を示すと表4のようになる。

表3：借用名詞の語末要素別ストレス位置の一覧表

語末の要素による分類	全体数	ストレスの語末からの位置			ゆれのあるストレスの語末からの位置		
		I	II	III	I～II	II～III	I～III
硬子音	2537	1558	799	67	108	3	2
˘й	131	47	83		1		
シュー音	93	79	5		9		
軟子音で終わる男性名詞	152	87	55	2	6	1	1
軟子音で終わる女性名詞	106	95	9	2			
˘а屈折無し	12	9	2		1		
˘е	70	61	7	2			
˘о屈折無し	122	34	68	13	6	1	
˘и屈折無し	52	14	30	1	6		1
˘у	13	8	3		2		
˘ю	8	8					
˘э	3		3				
˘а, ˘я	1110	98	844	139	17	10	2
˘ея, ˘уя	37	4	30	1	2		
˘ия	562		88	421	2	49	2
˘о屈折有り	6		5		1		
複数形のみ語	64	4	49	8	1	2	
複数形で用いられることの方が多い語	81	1	67	12	1		
計	5159	2107	2147	668	163	66	8

(4a)の「語末から3つ目までの音節」には屈折語尾も含まれているが、Суперанская (1968)は、複数形でしか用いられない語と複数形で用いられることの方が多い語は複数主格形（屈折語尾は1母音からなる）、それ以外の語は単数主格形（屈折語尾はゼロ語尾か1母音からなる）のみを扱っているので、データに含まれる屈折語尾は母音1つからなるものかゼロ語尾のどちらかとなる（語形変化するロシア語名詞の語幹は通常子音で終わる）。そこで、「語末から3つ目までの音節」とは、表4の「語末の音素／屈折の有無」の区分のうち「子音／屈折有り」では語幹の末尾3音節、「母音／屈折有り」では屈折語尾の音節か語幹の末尾2音節のいずれかの音節ということになる。

ここで、母音で終わりながらその語末の母音が屈折変化しないという借用語に特有の「母音／屈折無し」（不変化語）について、その語末の母音を語幹内にあるとみなすとする、次のようなことが言える。すなわち、「子音／屈折有り」ではI、IIとI-IIのゆれを合わせて97.4%、

「母音／屈折無し」でI, IIとI-IIのゆれを合わせて93.7%, 「母音／屈折有り」でII, IIIとII-IIIのゆれを合わせて92.7%となり, ほとんどが語幹末あるいは語幹次末音節のどちらかにストレスを持つということである。また, 語幹末音節と語幹次末音節のどちらにストレスが置かれることが多いかと言えば, 3つすべてのタイプにおいて語幹末の方が多いと言えるが, Суперанская (1968) が指摘したように, 語末の要素をより細かく見るとそれぞれのグループ内でも偏りがあり, 語末の要素によってストレス位置の類推が働いていることを思わせる。

表4：表3の分類別集計

語末の音素／屈折の有無	総数	ストレスの語末からの位置			ゆれのあるストレスの語末からの位置		
		I	II	III	I~II	II~III	I~III
子音／屈折有り	3019	1866	951	71	124	4	3
	100%	61.8%	31.5%	2.4%	4.1%	0.1%	0.1%
母音／屈折無し	280	134	113	16	15	1	1
	100%	47.9%	40.4%	5.7%	5.4%	0.4%	0.4%
母音／屈折有り	1860	107	1083	581	24	61	4
	100%	5.8%	58.2%	31.2%	1.3%	3.3%	0.2%

3.3 英語からの借用語

3.3.1 調査対象

Суперанская (1968) の研究は, 借用の時代による違いも借用元の言語の影響も捨象しているうえ, 今となつては40年以上も前のものである。その後, ロシアの社会も大きく変貌し, 英語からの借用語が特に急増しているとみられる。そこで, ここでは英語からの借用語を1つの事例として取り上げて分析する。データ元として, 18世紀以降に取り入れられた現代ロシア語における借用語を集めて最近出版された借用語辞典 Крысин (2008) を用いる。この辞典は, 巻頭の記載によれば全体の収録語彙が2万語余, 収録範囲は18世紀から21世紀初頭とされているが, 初出年代の記載のある語源辞典 Черных (1999) において17世紀以前の初出となっている語も含まれている。

データとする各収録語彙の使用頻度や定着度は明らかではない。他の一般的な辞書にも掲載されていることを定着度の基準として, ある程度定着した語彙のみを対象とすることも考えられるが, いわゆる新語辞典の類を除くと新しい語彙が掲載された一般的な辞書というものが見当たらないし, 一方で新語辞典には定着度の低いものも掲載されているため, この方法は採らないことにした。Резниченко (2007) のアクセント辞典等を参照すると, ストレス位置は Крысин (2008) に記載されているもの以外のストレス位置が併記されているものがあり, 他にもゆれが見られる可能性があるが, ここでデータの数に言及するときは Крысин (2008) の辞典

の記載のみを対象とする。

分析の対象とするのは、この辞典の中で、英語からの借用であることを示すангл.の表示が直接の語源を示す欄に挙げられている名詞のうち、英語にない接辞の付加（例えばпудлингование (< puddling)）や英語で用例の見られない語基の複合（例えばрудерпис (< rudder+piece)）が生じているものを除外したものである。ただし、буты (< boots) のように屈折語尾が付加されただけのものは対象とする。なお、英語の-tion に相当するロシア語の派生接辞-цияは、ギリシア語あるいはラテン語に由来する形であるが、ドイツ語やフランス語の-tionの借用形もほぼすべてが統一的に-цияに置き換えられているため、これもデータに含めている。ほかに、学問の名称を示す英語の-ics はドイツ語-ikからの借用語と同様にロシア語において-икаに統一されているなどの変化があるが、こうしたものはすでにロシア語に入っている語彙の慣例に従ってロシア語に入り込むために形態素を共有するための変化とみなし、英語からの借用語として数えることにする。一方、たとえば上述のпудлингование (< puddling) や транец (< transom) のようにスラヴ語系の派生接辞が付加されたものや、толлингер (< tolling+er?), рында (< to ring the bell のうちの ring the か?) のように英語において対応する語形や句が見いだせないもの、また фоб (< F. O. B) のように英語で一字ずつ読む頭字語をロシア語で1音節語として読んでいるようなものは除外した。

また、Крысин (2008) は現時点で比較的新しい語彙までが収録されている点と、すべての掲載語に直接の借用元の言語名が記されており、その言語が他の言語から借用している場合にはそれも記述されているという点に特色があるが、その記述は語源辞典のように詳細な典拠が示されているわけではなく、初出年は記されていない。

データのうち、初出年代の記載のある語源辞典Черных (1999) にも掲載されているものは数が少ないが、見出されたデータから、次のようなことが言える。まず、18世紀までの借用語彙には海事関係やイギリスの社会制度、商取引などに関する語が多い。機械関係の語彙もあるが、これは自動車や飛行機などに関する語彙が英語において生じ始める19世紀末以後のものが特に多い。19世紀以降は、スポーツ・交通・ファッション・食料品・ペット関連の語彙が多く、20世紀はそれに加えて音楽や通信に関する語彙が多く入っている。

Черных (1999) の辞書はそれ自体が編纂された時期が古いため (Черных の死去は1970年)、特に新しいと思われる語彙にはこの辞書に載っていないために初出年代が不明なものが多いが、英語における初出年代から借用時期も新しいとみることができるとも語彙もある。そのような語彙は、情報技術やスポーツ、アメリカの風俗などに関したものが多く、こうした事情から借入の時期が新しいことが明らかである語彙とそうでない語彙を分けて分析することも可能だが、借入時期が古いものでもКрысин (2008) において古いストレス位置が記されているわけではなく、これらのデータからストレス位置の変化を探ることはできないので、借入語のストレ

ス位置の通時的変化はここでは扱わないことにする。

3.3.2 データの分類とストレス位置の分布

最初に、データの大まかな分類とその該当語数を見る。まず、屈折する語と不変化の語に分け、それぞれを Крысин (2008) の見出し語形である主格形（単数形の場合と複数形の場合がある）の末尾が子音のものと母音のものに分ける。さらに、子音で終わる語はその全体の音節数、母音で終わる語は末尾の母音を除いた音節数を語幹音節数とし、それぞれを語幹音節数によって分類する。それぞれの分類の語数は表5のとおりである。ただし、ここには主強勢を複数持つ語は含まれていない。

表5：英語からの借用語として取り扱うデータの数

語幹音節数		屈折する語							不変化語				
		1	2	3	4	5	6	7	0	1	2	3	4
末尾	子音	248	524	265	64	17	3	1	0	4	6	2	0
	母音	40	29	29	30	12	4	0	2	52	21	9	1
計		287	553	293	94	29	7	0	2	56	27	11	1

さらに、表6に、それぞれの分類における語幹末尾からのストレスの位置（i～iv（ただし母音で終わる不変化語は語末からの位置I～IIIを下に併記）ごとの該当語数（上段）と、そのストレス位置が英語と一致するか否か（下段＝一致：不一致：不明）を示す。ストレス位置が屈折語尾とみられる母音にある場合（主格形がゼロ語尾の子音で終わる語は、屈折語尾が母音を持つ語形において屈折語尾にストレスが置かれる場合）はストレス位置を「語尾」とし、パラダイム内でのストレス位置の移動があるとされる場合には「移動」とした。データの中で見られた移動のパターンは、すべて単数形全体で語幹、複数形全体で屈折語尾（ゼロ語尾の語形では語幹末）にストレスを持つというものである。

表6：英語からの借用語のストレス位置ごとの分類

		ストレス位置								
		語末	語尾	i	ii	iii	iv	移動	ゆれ	
屈折する語	1音節語幹語	子音	4 0:4:0	242 242:0:0	/	/	/	/	2	0
		母音	3 0:3:0	37 37:0:0	/	/	/	/	0	0
	2音節語幹語	子音	3 0:3:0	205 45:154:6	313 309:1:3	/	/	/	2	1
		母音	0	20 12:6:2	9 8:0:1	/	/	/	0	0
	3音節語幹語	子音	0	138 9:116:13	97 46:43:8	29 25:3:1	/	/	0	1
		母音	0	11 6:4:1	17 12:5:0	1 1:0:0	/	/	0	0
	4音節語幹語	子音	0	22 1:19:2	33 10:23:0	8 7:1:0	1 1:0:0	/	0	0
		母音	0	6 3:3:0	24 18:4:2	0	0	/	0	0
	5音節以上の語幹を持つ語	子音	0	14 0:13:1	7 2:3:2	0	0	/	0	0
		母音	0	1 0:1:0	15 11:3:1	0	0	/	0	0
	不変化語	子音	/	7 4:3:0	4 4:0:0	1 1:0:0	/	/	0	0
			8 6:2:0	65 59:6:0	12 11:1:0	0	0	/	0	
		母音	I	II	III	/	/	/	0	

ストレス位置はロシア語・英語ともに主強勢のみを見ており、表6にもロシア語における主強勢が2つ以上のものは含めていない。英語のストレス位置は、利用できたものの中で語数が多く、新しい語彙を含んでいるものとして、『小学館ランダムハウス英和大辞典 第二版』(1993), 『研究社新英和大辞典 第六版』(2002)に求めたが、複数の主強勢が示されている場合、そのうちのいずれかとロシア語のストレス位置が一致していれば「一致」とみなした。また、英語では品詞によってストレス位置が異なる場合が少なくないが、基本的に Крысин (2008)において原語とされている語の品詞との一致を調べた。データの中には原語とされる語形がこれらの英語辞書に載っていないものもあり、インターネットなどでの用例は見られるがストレス位置が確認できなかったものもある。それらはストレス位置の一致が「不明」とした。また、英語辞書の見出し形にないものでも、動名詞を作る -ing や複数形を作る -s が付いた屈折形は、基本形のストレス位置と同じとみなした。

この表6から、全体として i (語幹末音節) または ii (語幹次末音節) の位置がストレス位置

として多く選ばれていることが分かる。この結果は3.2節で見た Суперанская (1968) のデータ等とも一致する。英語のストレスとの一致を見ると、特に1音節語幹語を除く子音で終わるタイプの語では、語幹末にストレスを置く場合の多くが原語のストレスに反していることがわかる。これは、あえて原語のストレスと異なる位置にストレスを置こうとする理由がないとすれば、英語の名詞で語幹末にストレスを置くことがそもそも少ないということが不一致の1つの理由として考えられる。一方ロシア語では、原語の影響なしに語幹末にストレスを置く何らかの要因があるはずである。

その要因として、1つは Суперанская (1968: 258) の言う「19世紀の初頭から、西方の諸言語から借用された全ての語において強勢をフランス式に固定させる傾向があり、非フランス起源の語の強勢のゆれの新しい波が起こり、その一部が20世紀に持ちこされたという経緯が考えられる。また、このことが引き金となっているのか、それとも固有語の語幹アクセントを示す名詞の傾向に倣っているのかは不明だが、現に Crosswhite et al. (2003) や安藤 (2008) で無意味語について指摘されているデフォルト位置もまた、借用語におけるデフォルト位置として機能している可能性がある。さらに、2つの要因が形態論的観点から考えられる。1つは1.2節で述べた複合語のストレスが後項に配置される傾向であり、もう1つは、語末の要素の形態素としての扱いである。次節では後者についてデータを分析する。

3.3.3 語末要素とストレス位置との関係

(4b) で見たように Суперанская (1968) は語末の要素によってストレス位置に偏りがあることを指摘しているが、その要素が形態素として何らかの意味や機能を担っているものか、それとも偶然に形が一致しているだけなのかは区別していない。そこでまず、 Крысин (2008) からのデータの中に多く現れる語末要素を持った語を取り出してみると、表7ようになる。表7は、Суперанская (1968) が挙げた英語以外の言語からの借用語を含むデータのうちに、当該の語末要素を持つ語の数をストレス位置ごとに数えた値（ゆれは除外）をもS欄に示しており、今回のデータとS欄のどちらも該当語数が0の場合には行を設けていない（ただし -ер, -ерз, -ерс の項と -инг, -ингс の項のS欄はそれぞれ Суперанская (1968) の -ер と -инг のみの数値である）。これと比較すると、所属語彙はかなりずれているにもかかわらず、最近の借用語を含む英語からの借用は同書と全体的な傾向が大きく変わらないことがわかる。

表7-1から、-ал, -ан, -ей, -ек, -изм, -ин, -ист, -ит, -ол, -он, -орд, -от を持つ語（必ずしも形態素としてではなく、語形の一部として）は圧倒的に語幹末音節（すなわちこれらの要素を含む音節）にストレスが置かれることが多く、しかもそのほとんどの場合に英語のストレス位置とは一致していないことが分かる。数少ない次末音節および前次末音節にストレスが置かれるケースは、すべて原語のストレスに一致している。これらの語末要素をA群と呼ぶことにする。

表7-1：語末要素によるストレス位置の分布

末尾	語数	ストレス位置	語幹音節数				S
			2	3	4	5以上	
-ал	11	i (11)	5 (2:3:0)	3 (0:3:0)	2 (0:2:0)	1 (0:1:0)	60
		ii (0)	0	0	0	0	2
-ан	11	i (8)	4 (1:3:0)	4 (1:3:0)	0	0	50
		ii (3)	1 (1:0:0)	1 (1:0:0)	1 (1:0:0)	0	7
-ей	12	i (11)	8 (1:7:0)	3 (0:2:1)	0	0	31
		ii (1)	0	1 (1:0:0)	0	0	0
-ек	10	i (10)	6 (0:5:1)	4 (1:3:0)	0	0	6
-изм	40	i (39)	8 (1:7:0)	14 (0:12:2)	7 (0:6:1)	10 (0:9:1)	7
		ii (1)	1 (1:0:0)	0	0	0	0
-ин	10	i (7)	1 (0:1:0)	6 (2:4:0)	0	0	59
		ii (3)	3 (3:0:0)	0	0	0	1
-ист	6	語尾 (1)	1 (0:1:0)	0	0	0	
		i (5)	0	3 (0:3:0)	0	2 (0:2:0)	18
		ii (0)	0	0	0	0	4
-ит	14	i (11)	3 (0:3:0)	8 (0:8:0)	0	0	68
		ii (3)	3 (3:0:0)	0	0	0	1
-ол	11	i (11)	8 (1:6:1)	3 (0:3:0)	0	0	26
		ii (0)	0	0	0	0	7
-он	36	i (34)	17 (0:17:0)	14 (0:13:1)	3 (0:3:0)	0	45
		ii (2)	2 (2:0:0)	0	0	0	7
		iii(0)	—	0	0	0	1
-орд	7	i (6)	5 (0:4:1)	1 (0:1:0)	0	0	9
		ii (1)	1 (1:0:0)	0	0	0	0
-от	11	i (10)	6 (1:5:0)	4 (0:3:1)	0	0	14
		ii (1)	1 (1:0:0)	0	0	0	1

一方、表7-2の中の -ель, -ер類, -ик, -ика, -инг類, -ия, -ор (B群とする) を末尾に持つ語は語幹の次末音節 (すなわちこれらの要素の左隣の音節) にストレスが置かれることが多い (пиксель (< 'pixel) 等)。そして、語幹末に置かれる数少ないケースでは、これらの要素だけでひとつの形態素をなしていない場合 (мо'хер (< 'mohair), спани'ель (< 'spaniel) 等) がほとんどである。このことから、B群の少なくとも一部はロシア語において特定の意味あるいは機能を持った形態素となっており、偶発的に形が同じでもその意味・機能に合致しない場合は形態素とならずに語根の一部としてデフォルトアクセントに従っていることが考えられる。

表7-2：語末要素によるストレス位置の分布（続）

末尾	語数	ストレス位置	語幹音節数				S
			2	3	4	5以上	
-ель	7	i (1)	0	1 (0:1:0)	0	0	13
		ii (6)	6 (6:0:0)	0	0	0	24
-ер, -ерс, -ерз	144	i (5)	3 (0:3:0)	2 (0:1:1)	0	0	75
		ii (200)	143 (143:0:0)	50 (25:19:6)	8 (2:6:0)	1 (0:1:0)	167
		iii (15)	—	12 (11:1:0)	3 (2:1:0)	0	6
		iv (1)	—	—	1 (1:0:0)	0	
-ик	12	i (1)	1 (0:1:0)	0	0	0	9
		ii (10)	8 (8:0:0)	1 (1:0:0)	1 (1:0:0)	0	81
		iii (1)	—	1 (1:0:0)	0	0	1
-ика	15	i (0)	0	0	0	0	1
		ii (15)	0	4 (4:0:0)	10 (9:0:1)	1 (1:0:0)	91
-инг, -нигс	83	i (1)	1 (0:1:0)	0	0	0	0
		ii (77)	61 (61:0:0)	10 (1:9:0)	4 (1:3:0)	2 (0:1:1)	17
		iii (5)	—	5 (4:1:0)	0	0	0
-ия	37	i (2)	0	1 (0:1:0)	1 (0:1:0)	0	88
		ii (35)	1 (1:0:0)	7 (5:2:0)	13 (9:3:1)	14 (10:3:1)	421
-ор	40	i (6)	3 (1:2:0)	2 (0:2:0)	1 (0:1:0)	0	36
		ii (33)	8 (8:0:0)	13 (9:3:1)	9 (2:7:0)	3 (1:1:1)	91
		iii (1)	—	0	1 (1:0:0)	0	0
-ут	12	i (4)	2 (0:2:0)	2 (0:2:0)	0	0	10
		ii (7)	3 (3:0:0)	4 (1:3:0)	0	0	4
		iii (1)	—	1 (1:0:0)	0	0	1
-ет	11	i (6)	4 (0:4:0)	1 (0:1:0)	1 (0:1:0)	0	24
		ii (5)	3 (3:0:0)	0	2 (1:1:0)	0	4

また、B群を持つ語のストレスがiiに置かれる多くの場合が英語のストレス位置に一致しているが、一致しない場合はすべてこれらの要素より左側の音節の間での食い違い（процессор (<'processor) 等）である。英語で語末音節にストレスを持ちながらロシア語においてiiやそれより左にストレスを持つ例はない。

なお、-ер、-ингを持つ рекрутер (<re'cruiter) および рекрутинг (<re'cruiting) のみが原語の次末音節より左にストレスを持つが、これはおそらく、Крысин (2008) によればポーランド語から借用されたとされる рекрут により、語根 рекрут が初頭音節にストレスを持つのではないかと思われる（ただし Fasmer (1971) には、ポーランド語からの рекрут と並んで、ドイツ語から借用された形として ре'крут も挙げられている。また、Суперанская (1968: 117-119) では ре'крут から рекрут への変化が述べられている）。

また、表7-2の中での-утを持つ語もB群と似た傾向を示すように見える。しかし、скаут

(< scout) 等, ii にストレスを持つ7例すべてで, この -yt /ut/ の直前の音がaあるいはoの母音であり, 語末の2音節が英語の二重母音音節 (音素としては二重母音ではない綴り字上の au, ou に対応するものを含む) に対応していることから, B群の傾向とは別の音韻論的要因によって次末音節にストレスを持っていると考えられる。英語の二重母音に対応していない, iおよびiii にストレスを持つ例 ('азимут (< 'azimuth), лили'пут (< 'Lilliput) 等) のみを見ると, 語数の分布はむしろA群のそれである。こうした原語の二重母音 (字) の影響は, про'моутер (< pro'moter), экс'гаустер (< ex'hauster) などにおいても, y /u/ でなく a /a/ にストレスが置かれているという点に見られる。これは, 2.2.1 で見た Николаева (1971) の母音連続に対する指摘 (2c) ととも一致する。

A群とB群を比較すると, どちらもiiより左にストレスを置くのは原語のストレスによる場合が多く, iに置くのは原語に一致しない場合がほとんどであるという点は共通している。この点は, 残る -ет (表7-2) を語末に持つ語にも当てはまる。

一方, A群とB群で異なるのは, どちらも英語の派生接尾辞として成り立つものは英語においてそれ自体にストレスを持つものではないのに, ロシア語においてはA群のみストレスが置かれることが多く, B群のみがストレスを持たない性質を受け継いでいるという点である。A群とB群とで, ロシア語における初出時期がわかる範囲から言って, その年代による偏りは見られない。

A群の形態素としての性格について見ると, -изм, -ист (-ism, -ist) などが英語でもロシア語でも派生接辞として用いられる形であるのに対して, -ол, -ей などは偶然に語末が同じ形になっただけで意味上の共通性はないため形態素であるとは言えない。派生接辞であっても偶然の形の一致であっても結果に違いはないが, -изм, -ист (-ism, -ist) などの形態素は英語からの借用語だけでなくドイツ語やフランス語からの借用語においても数多く現れることから, これらの語末要素がそれ自体にストレスを持つ傾向をフランス語などから受け継ぎ, 英語からの借用語にも適用している可能性がある。

B群について言えば, 偶然にその形で終わっている, 意味的なつながりのない語例 (пу'ловер (< 'pullover) 等) もあるが, -ель /el/ 以外は英語において対応する形態素 (-er, -ic, -ics, -ing, -ion, -or) を持つ形である。-ель については, 次末音節にストレスを持つ6語のうち5語 ('баррель (< 'barrel), 'бридeль (< 'bridle), 'бушeль (< 'bushel), 'пиксeль (< 'rixel), 'чизeль (< 'chisel) は原語の最終音節の母音が発音されない (あるいは脱落することがある) 弱化したものであることが, 意味的なつながりなしにストレスを持たないという類推を引き起こしている可能性が考えられる。(唯一, 原語において -ель 相当部分の母音が弱化しない例である 'топсeль (< 'topsail) は, 専門家アクセントとしては複数形 топсел'-я, топсел'-ей 等で屈折語尾にストレスが移動するという点でも他と異なっている。)

B群がストレスを直前に置く傾向を示しているか、ただストレスを回避する傾向を示しているかということについては、B群の中でも個別に異なるようである。例えば *-ика* は対応する英語の形態素 (*-ics*) の直前にストレスが置かれるのと同様に、すべての例でその直前すなわち *ii* にストレスを置いている。一方、多数の例を持つ *-ер* 類、*-ор*、*-инг* 類の場合は、*ii* にストレスを置くものが多いが、それより左に置くものも少数ながらある。*ii* に置かれることが多い理由は、これらの要素の前に来る要素が動詞である場合が多いことにあると考えられる。原語の構造が「単独の動詞」+「B群に対応する形態素」である場合、英語の動詞のストレスは末尾音節にあることが多いために、B群の要素が付加されたときにストレスの位置が *ii* になるという説明が付けられる。

なお、B群には母音で終わる語の末尾要素が2つ (*-ия*、*-ика*) 含まれているほか、*-ер* 類も複数主格語尾の母音 *-ы* を持つ例 (*ле'вellers* (< 'leveler) 等) があり、これらを合わせると3音節以上の語幹を持ち母音で終わる語の大半を占める。表6に挙げた母音で終わる多音節語幹語の中でも *ii* にストレスを置く語が多くなっているのは、これらの要素のB群の性質によるものであると言える。

3.3.4 複合語のストレス位置

ストレス位置が *i* でなく、また原語とも一致しないのは、3音節以上の語幹を持つ語において、原語よりもロシア語のほうが右寄りにストレスを持つ場合がほとんどである (例えば、*винд'роуэр* < 'windrower, *боди'билдинг* < 'bodybuilding 等)。そのような場合の多くは、語根を2つ持つ複合語である。2.1節で述べたように、ロシア語の名詞複合語は後項にストレスを置くパターンが圧倒的に生産的であるため、借用語においても語根の境界を感じる場合にはロシア語の複合語のパターンが適用され、後項にストレスが置かれているためであると考えられる。英語では複合の度合いの強い複合語は前項がストレスを持つことが多いため、複合語ではストレス位置が原語と一致しないものが結果的に多くなる。ロシア語において語根の境界が認識されているかどうかを調べることは困難なため、複合語とそれ以外のケースの数を数えることはしないが、例えば *овер'тайм* (< 'overtime), *во'ергейт* (< 'Watergate) 等のように、語幹末のデフォルトと一致しているものの中にも複合語アクセントの傾向に従っていると見られるものが多数ある。

3.3.5 不変化語のストレス位置

Крысин (2008) からのデータの分析の最後に不変化語についてまとめておく。母音で終わる不変化語は、その語末の母音を語幹に入れるかどうかの問題になるので、ここでは語末の母音を語尾とは呼ばず、単に語末音節に属する母音としておく。

まず、子音で終わる不変化語は12語あるが、そのうち9語は原語のストレスと一致しており、一致していない3語（плей-⁰офф (<playoff), максим (<Maxim), ре⁰глан (<raglan)）はいずれも2音節語で末尾音節にストレスを置いている。ここから、子音で終わる場合は屈折する語と同様に語幹末（＝語末）の音節がデフォルト位置であると考えられる。

次に、母音で終わる不変化語は85語あるが、そのうち原語のストレスと一致しないのは9語であり、そのうち6語は語末から2番目の音節にストレスを置く。残る3語のうち、1語はджер⁰си (<jersey) で、これはКрысин (2008) において語尾にストレスを持つとされるが、Резниченко (2007) などにおいては語幹にストレスを持つとされ、語尾にストレスを置くのはフランス語由来のджер⁰се の形であるとされる。また1語は, ре⁰фери (<referee) であり, Крысин (2008) において III にストレスを持つとされるが, Резниченко (2007) などにおいては I にストレスを置く形が併記される。この語について Суперанская (1968: 249) は、語尾にストレスを置くのは英語の発音に近い形であり、語頭に置くのは「英語のあらゆる語のストレスは第1音節に置かれるものだ」という誤った予測によるものだとして述べている。残る1語は, барбе⁰кю (<barbecue) で、これはおそらく語末要素 -ю を持つ名詞がほとんどすべて末尾にストレスを持つことから、そうしたものからの類推であろうと思われる (Суперанская (1968: 254) のデータでは -ю で終わる8語 (表3) がすべてフランス語由来で末尾にストレスを持つ)。原語と一致しない9語のうち、上記のようにゆれがあったりフランス語由来であったりするものを除く6語が II にストレスを持つことから、そこがデフォルト位置であって末尾の母音は屈折語尾と同じ扱いになっているように見える。しかし、この6語のうち1語 (ватер⁰поло (<waterpolo)) は複合語であることがストレスの位置を決めている可能性があり、また他の4語 (пип-⁰шоу (<peep show), ток-⁰шоу (<talk show), ноу-⁰хау (<know-how), чай-⁰чай (<chow-chow)) は複合語 (および畳語) でもあり、また最後の2音節が原語における二重母音に対応した母音連続になっていることがそこにストレスを置く原因になっていることが考えられるので、これだけの事例 (残りは ка⁰течу (<catechu) 「阿仙 (薬・染料)」のみ) からデフォルトを決めたり語末の母音の扱いを決めたりすることは難しい。

原語との一致／不一致を無視してデータを見てみると、I にストレスが置かれた数は、屈折する語の語尾に比べれば多いが、母音で終わる不変化語の II, III に比べると少ない。母音で終わる不変化語で圧倒的に多いのは II にストレスが置かれるものである。語末の母音が語幹に含まれないとすれば II = i となり、数としては「語幹末＝デフォルト」の仮説に合致するが、語幹に含まれるとすれば II = ii となり、不変化語は多くが語幹次末音節にストレスを持つことになって特殊であるように見える。しかし、原語で語末の母音にストレスを置くものが少ないことを考慮すれば、I すなわち語幹末にストレスを置く語が少ないのは意外なことではない。

Суперанская (1968) のデータと比較すると、屈折する語の場合と異なり、顕著な相違がみら

れる。Суперанская (1968) は不変化語として母音で終わるもののみを集計しているが、その語末の母音を含む音節にストレスを置く語が最も多い。おそらくこれは、データにフランス語等からの借用語が多く含まれており、原語のアクセントの影響が表れているものと考えられる。

こうしたことから、また、不変化語はその名の示すとおり他の屈折形を示すことがなく原語に似た形のままで常に用いられることから、原語のストレスを保存する傾向が比較的強いということが考えられる。Суперанская (1968) はこれについて、次のように述べている。

- (5) もっとも典型的なロシア〔語の形態論〕に合致していない語、特に屈折しない語は、ロシア語の体系への浸透が最も少ない。そうした語は、それを生み出した体系に引っぱられ続け、多くの場合、ロシア語にとって体系外の現象の状態に留まる。このこととの関連で、ロシア語においてその語が従い得る類推が存在しないので、こうした語は当初の強勢を変革することが最も少ない。(同書: 261, 訳は筆者による)

なお、不変化語はA群・B群の語末要素を持つものがないため表7には含まれていない。不変化語の中で多く見られた語末要素は4例がある -ити のみであるが、この4例 (-итиを接尾辞として持つ паблицити (< publicity), процперити (< prosperity), сеkjюрити (< security) と、 -итиを形態素として分離しない вапити (< \wapiiti) はすべて -ити の直前の音節にストレスを持ち、原語のストレス位置に一致する。

4. 現代語におけるデフォルトと形態素情報の関係について

前節における、現代ロシア語の名詞のストレス位置のデフォルトに関する先行研究の検討および英語からの借用語のデータの分析により、デフォルトが語幹末音節であることが裏付けられた。さらに、借用語のストレス位置は(6)のような要因によってほぼ説明がつくということがわかった。

- (6) a. 語幹末尾がストレスの傾向を知られた形態素である場合、その形態素を持つ他の語のストレス位置に倣う。
 b. 複合語は借用語でも後項にストレスを置く傾向が強い。
 c. 上の2点に当てはまらない場合、原語のストレス位置を維持するか、デフォルトとして語幹末にストレスを置く。

(6a) は、本稿では英語からの借用語についてのみ検討したが、Суперанская (1968) による(4b)の指摘もこれに矛盾しないことから、他の言語からの借用語においてもA群/B群のような語末要素の分類が可能であることが予測される。(6c)については、どのような場合に原語のストレスを保存し、またどのような場合にデフォルトに従うのかの条件が借用時期や定着度などと相関することが予想されるが、現段階では明らかでない。

では、こうしたストレス位置の決定の要因は、固有語を含めた現代ロシア語の中でどのよ

うに機能していると考えるのが妥当であろうか。以下、4.1において通時的研究から得られたアクセント法(2.1)の説明の流れの中で現代語を扱う場合の問題点を整理し、4.2において本稿で論じてきた語幹末のデフォルトが現代語の名詞全般に適用されたと見ることの利点を述べる。さらに、4.3において現代語の名詞のストレスが算出される効率的な形態素の指定とストレス付与の仕組みのありかたを提案する。

4.1 従来のシステムを維持した場合の問題点

もし、ロシア語のシステム自体が通時的に変化しておらず、語彙的にのみ変化しているとするれば、伝統的な形態素の特性と「左に位置するものが優先される」という原則に従うことになる。すると、A群の語末要素が「それ自体にストレスを置く」という性質をもつ形態素であると仮定する必要があり、しかもそれがより左に位置する語根の形態素より優先される支配的接尾辞であると仮定しなければならない。しかし、A群の中には意味や機能の共通性を持たず、形態素としての資格が認められないものも存在するという矛盾がある。また、この伝統的なシステムでは、形態素が無標の場合に語頭の音節にストレスを持つことになるが、複数音節語幹語においてそのようなストレスを持つものは少数派であるという問題もある。

4.2 デフォルトを活かしたストレス位置の決定の仕組み

一方、語幹末をストレス位置のデフォルトとして指摘したCrosswhite et al. (2003)は、最適性理論の枠組みにおいて、語幹の右端といずれかのフット(弱強格)の右端の一致を求める制約ALIGNRIGHTの機能によってこのデフォルトを説明している。そして、他の位置の有標的なストレスはL/R-FOOTANCHORを、移動アクセントのパタンの一部はANTI-FAITHをALIGNRIGHTより上位に位置づけることによって説明している。この説明では、単数形全体と複数形全体でストレスの対立を示すタイプの移動アクセントを示す語について、ANTI-FAITHによってbaseである単数形とoutputである複数形のストレス位置の相違がもたらされ、ALIGNRIGHTによって複数形のストレスが語幹末かそれに可能な限り近い位置にある候補が選ばれるようになっている。このことから、現代語では借用語においても移動アクセントを示すような固有語においてもALIGNRIGHTが機能し、語幹末のデフォルトを支えていることが示される。

しかし、Crosswhite et al. (2003)は、様々な移動アクセントのパタンにおいて、それぞれの形態素がどのような形でストレスに関する指定を持つかといったことには触れておらず、今後の究明が待たれる。また、同書は入力形において語幹をさらに細かい形態素に分解することはしていないため、ストレスに関して一貫したふるまいを示す派生接尾辞や複合語の語構成がどのようにストレス位置に関わっているかも明らかになってはいない。

このようにシステム自体が変化したものとして、デフォルトのストレス位置を語幹末とし

たうえて形態素ごとにストレスに関する指定を仮定する場合、A群の語末要素には何ら特殊な性質を想定する必要がない。その代わり、B群を、ストレスを回避する、あるいは前の形態素に置くといった性質を持った形態素とみなすことになるが、B群のほとんどが意味的に形態素として成り立っており、意味的な共通性がない場合にはB群としての性質を発揮していないことから、A群を特定の形態素として扱うよりは、B群を形態素としてこれにストレスに関する特性を付与することのほうが妥当性が高いと言える。

語幹を形態素に分解したうえてCrosswhite et al. (2003) の説明を援用するとすれば、B群の-ияなどの形態素の左端に右端を持つフットを仮定することになるだろう。そうすると、入力形における各フットの左端／右端が出力形のいずれかのフットの左端／右端に一致することを求める制約L/R-FOOTANCHORの働きにより、こうした形態素の持つ指定が活かされることになる。

この場合、語尾固定アクセントや移動アクセントといった固有語に特徴的なストレスの現れ方についても、これらの語を構成する形態素になんらかの指定があると仮定しなければならないが、少数派でありながら使用頻度の高い(Tornow (1984) のデータによる)語が多いこれらのタイプが有標であるのは自然なことである。

4.3 現代ロシア語の名詞のストレス位置を決める道筋

スラヴ語から韻律体系が変化して久しく、借用語が増大した現代ロシア語においては、これまでの議論から名詞のストレス位置を決める道筋として次のような図式が想定される。

複合語・B群の性質を帯びた語末要素を持つ語・支配的接尾辞を持った語はまずその性質によってストレスを付与され、これらの外形的特徴を持たない語のうち、原語のストレスを保存する語・語尾アクセント語幹・移動アクセントを示す語・語幹末以外の位置にストレスを持つ固有語は有標の語幹としてストレスを付与される。こうしたマーキングのない語、つまり多くの単純語(固有語および借用語)や無意味語はデフォルトのアクセントとして語幹末のストレスを持つという順である。このように考えることにより、伝統的な「左の形態素の特性を優先する」という原則で説明するよりも、各形態素が担わされる情報が少なくすむことになる。

なお、移動アクセントは若干の借用語、特に特定の語末要素を持つ語においても生じており、そうした語末要素が類推の元になっていることが考えられるが、今回の英語からの借用語のデータにはそのような例が少なかったため、明確な結論は出せない。

5. まとめ

本稿では、無意味語や借用語のストレス位置を決める主な要因が、語幹末のデフォルト位置に加えて、借用語では原語のストレス位置・語構造・ストレス位置に関して一貫性のあるふ

るまいを示す語末要素に基づいた類推にあることを、先行研究と英語からの借用語のデータによって示した。

現代ロシア語のストレス位置の説明に関する今後の課題として、こうしたストレスを決める様々な要因が形態素にどのように指定されているかという問題や、Crosswhite et al. (2003) が提示した最適性理論の枠組みにおける様々なタイプの語例の検証、4.3で述べたストレスの効率的な配置の道筋についての想定の理論的な枠付け、副強勢の配置の仕組みの究明などが挙げられる。

参考文献

- Crosswhite, Katherine (2003) Thoughts and notes concerning a stress placement Experiment in Russian. roa.rutgers.edu/files/630-1103/630-CROSSWHITE-1-0.PDF (last modified: 08-Nov-2003 09:22)
- Crosswhite, Katherine, John Alderete, Tim Beasley & Vita Markman (2003) Morphological effect on default stress in novel Russian words. *WCCFL 22 Proceedings*:151-164. ed. G. Garding and M.Tsujimura. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.
- Garde, Paul (1976) *Histoire de l'accentuation slave*. Paris: Institut d'études slaves.
- Halle, Morris (1971) Remarks on Slavic accentology. *Linguistic Inquiry* 2: 1-19.
- Halle, Morris (1997) On stress and accent in Indo-European. *Language* 73 (2): 275-313.
- Idsardi, William (1992) The computation of prosody. Cambridge, Massachusetts: MIT, Dissertation.
- Tornow, Siegfried (1984) *Die häufigsten Akzenttypen in der russischen Flexion*. Wiesbaden : Harrassowitz.
- Зализняк, Андрей Анатольевич (1985) *От праславянской акцентуации к русской*. Москва: Наука.
- Крысин, Леонид Петрович (2008) *Иллюстрированный толковый словарь иностранных слов*. Москва: Эксмо.
- Николаева, Татьяна Михайловна (1971) Место ударения и фонетический состав слова (расстановка ударения в неизвестных словах иностранного происхождения). *Фонетика, Фонология, Грамматика: к семидесятилетию А. А. Реформатского*: 59-69. Москва: Наука.
- Резниченко, Ирина Леонидовна (2007) *Словарь ударений русского языка*. Москва: Аст-пресс.
- Суперанская, Александра Васильевна (1968) *Ударение в заимствованных словах в современном русском языке*. Москва: Наука.
- Фасмер, Макс (1971) *Этимологический словарь русского языка*, т. I-IV. перевод: О. Н. Трубачева. Москва: Прогресс.
- Федянина, Нина Архиповна (1982) *Ударение в современном русском языке*, Москва: Русский язык.
- Черных, Павел Яковлевич (1999) *Историко-этимологический словарь современного русского языка*, т. 1-2. 3-е изд., стереотип. Москва: Русский язык.
- 安藤智子 (2009) 「ロシア語母語話者に対する無意味語アクセント調査」『富山大学人文学部紀要第50号』pp. 23-41
- 『研究社新英和大辞典 第六版』(2002) 研究社
- 『小学館ランダムハウス英和大辞典 第二版』(1993) 小学館

付記

本稿は、平成21年度科学研究費補助金若手研究 (B) 「ロシア語名詞アクセントの動態と借用語の影響に関する研究」(課題番号19720094) による研究成果の一部である。